

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名

篠原学

ミラン・クンデラは、エッセイや小説の序文などにおいて、様々な形で、小説の自立の必要性について述べている。そこで問題となるのは、一方で、文学の「外部」である「歴史」や「政治」からの、他方で、自らの作品を意のままに支配しようとする、強力な「作者」からの、小説の、「自立」である。しかし、同時に、クンデラの小説が、ほかならぬ「歴史」や「政治」をその重要な構成要素としていることも、また、クンデラが、自らの作品の受容のあり方について積極的に発言を行い、自らの作品への「権利」を強く主張する「作者」であることもまた事実である。

篠原氏の博士論文『小説の自立 ミラン・クンデラという「作者」をめぐる』は、こうした、「歴史・作者からの作品の自立」と「歴史・作者の作品への介入」という、クンデラの根源的なジレンマに着目し、このジレンマの諸相を、丹念に跡付けた力作である。

本論文は、「序」、六章の本文、「結」の三部分から構成される。以下、論文の記述に従って、その内容を要約する。

「序」において、先行研究に対する、本論文の位置づけがなされたあと、第一章（小説と歴史）では、小説の、歴史からの自立、歴史の、小説への介入というジレンマが、中心的に論じられる。

クンデラにおいて、歴史や政治など、文学「外」的事象自体は、小説にとって非本質的なものとみなされる。逆に、小説にとって本質的であるのは、そうした外的事象とのかかわりの中で、人間の「実存」が露わになる状況（とりわけ恋愛）であるとされる。しかしこのことはまさしく、クンデラの小説が、歴史や政治などの外的事象から完全に自立しているわけではないことを物語っている。歴史は、小説にとって、「不可欠な他者」であり、歴史を通して、人間の本質に至る回路は常に「開かれている」と篠原氏は指摘する。

第二章（運命への態度）では、小説の、作者からの自立、作者の小説への介入というジレンマが、クンデラの初期作品、『ジャックとその主人』の分析を通じて明らかにされる。クンデラが、現実の政治的状況を生きた、「伝記的作家」としての自分を、作品から遠ざけようとするとき、今度はそれに代わって、作品を支配する強力な作者（篠原氏の表現を用いれば「父なる作者」）が立ち現れ、自立的作品への介入を行う。篠原氏は、こうした、父なる作者による、作品の支配の典型を、『ジャックとその主人』の登場人物の一人、サン＝トゥアンの騎士が発する台詞の中に見て取る。

しかし、この章ではまた、こうした「父なる作者」の支配を免れて、作者からの自立が

可能となった小説の様態の記述もなされる。この章のタイトルにある、「運命」が支配する作品がそれである。そこでは、父なる作者の意図や、その意図がもたらす物語の因果性を超越した、「運命」による作品の支配が、逆説的に、小説を作者による束縛から解放し、小説に、ある種の「自立」を与える契機となることが指摘される。篠原氏は、こうした、著者の束縛から自由になった小説のあり方の典型を、『ジャックとその主人』二幕九場のジャックの台詞の中に見て取る。

第三章（作者から読者へ）では、前半で、作者に対する作品の自立の問題が再び取り上げられたあと、後半では、「作者からの作品の自立/作者による作品の支配」という問題系との関係の中で、作品の「読者」が果たす役割の重要性が語られる。

この章の前半では、まず、小説の作者を、外的事象に無縁の抽象的存在としてではなく、「テキスト」を外的事象（「コンテキスト」）に係留する「錨」として定義した、ニナ・ペリカン・ストラウスの説が紹介される。次いで、こうした、コンテキストに根を下ろす「錨」としての作者のあり方とは、一見正反対に見える、ロラン・バルトの、「作者の死」という概念や、非人格的、非起源的な「書き手」(scripteur)という概念が紹介される。篠原氏は、前章の、「運命」をめぐる議論を受けて、クンデラの中には、ストラウスの「作者」のみならず、バルト的「作者の死」、あるいは、コンテキストから自立した「書き手」の存在もまた認められるとする。

章の後半では、以上のような、作品の自立と、作品への作者の介入という緊張の中で、その外側から、作品の自由な読みを実践する「読者」の存在の意義が語られる。篠原氏はそこで、テキストの読者が、作者の、作品への過度の支配を妨げる（作品に、作者の支配を免れたある種の「自立」を取り戻させる）要因となりうるとしつつも、同時に、この自由な読解を行う「読者」すら、実は、作者が創造し、作者が、自らの支配下に置いた存在でもありうるという点を指摘する。

かくして、作者からのテキストの自立を可能にすると考えられた、自由な読解を実践する「読者」すら、既に、作者の意図の中に組み入れられている可能性があることがわかる。「作品の自立」の希求と、作品への作者の介入という葛藤のドラマは、こうして果てしなく続いていく。

第四章、第五章では、この葛藤のドラマが再度とりあげられ、それが、第四章では、作者の側からの、自立的テキストを成立させる具体的諸「技術」の模索という観点から、第五章では、読者の側からの、作者の意図に反する、様々なテキスト読解の試みという観点から論じ直される。

まず、第四章（小説の技術）では、作者自身による作者消失の模索、すなわち、作者自身による、自立的テキストを可能にする諸「技術」の模索の様態が語られる。それら諸「技術」とは、具体的には、「紋中紋」（入れ子構造）、「デウス・エクス・マーキナ」（神の介入による物語の最終決着）、作者による自己テキストの意図的忘却（「自己検閲」）、フーガの技法などであり、いずれも、作者の意図を離れた「偶然」的要素の作品への導入を通じた、

作者自身による、作品への統御の放棄・抑制の試みである。しかしながら、これらの試みがいずれも、完全な作品の自立をもたらすには至らないという点が明らかにされたあと、この章の最後では、より有効な、作者自身による、自立的テキスト形成の「技術」としての「変奏」が、デリダの「反復可能性」(itérabilité) の概念と関連づけて論じられる。

続く第五章(読むことの権利)では、読者による、作者の意図に沿わない「読解」(「作者」の意図と読者の読みとの間の「齟齬」)の可能性について語られる。具体的には、「政治」「文化」「女性」「恋愛」といった主題について、クンデラ自身が示す方向性(「政治」と「文学」、「文化」の切断、「女性」、「恋愛」の絶対視)とは異なる読みを施す営為の中にも、逆説的に、クンデラのテキストを予期せぬ多様性へと開き、そのことによって、クンデラのテキストに、真の「自立」が付与される可能性が存することが示される。

最終の第六章(文学空間としてのヨーロッパ)では、ここまで論じられてきた、クンデラをめぐる、作品の自立と作者の介入という葛藤が展開される場としての、ヨーロッパという「文学空間」が問題にされる。篠原氏は、第五章で述べられた、多様な読解が逆説的に可能にするテキストの自立性という主題を冒頭でとりあげ、しかしこうした価値の「多様性」や「相対性」を許容するヨーロッパという空間が、実は、非ヨーロッパという他者の排除のうちに成り立っているのではないかと問う。そこでは、クンデラのヨーロッパをめぐる議論が、ポール・ヴァレリーの、『精神の危機』にみられる、ヨーロッパ的精髓の回帰の問題と重ね合わされる。

以上の議論を経たあと、篠原氏は、再び、クンデラにおける、小説の自立への希求の問題へと立ち返る。そして氏は、クンデラにおける、こうした「自立」への強い希求の根元的理由を、現実のヨーロッパから暴力的に放逐されてしまった、個的、私的存在の内奥的価値の、究極の救出の必要性のうちに見出す。

「結」では、第一章から第六章までの議論が振り返られた後、一見平明に見えるクンデラのテキストが、実際は、いかに、「深層における複雑さを覆い隠」しているか、という点が強調される。

冒頭でも述べたように、本論文は、「歴史・作者からの作品の自立」と「歴史・作者の作品への介入」という、クンデラの根源的なジレンマに着目し、このジレンマの諸相を、丹念に跡付けた力作である。このジレンマの問題に本格的に取り組んだ研究は、これまでほとんど存在せず、審査委員会でも、この点が、本論文の野心的な独創性を表すものとして高く評価された。

また、本論文は、クンデラのテキストに内包され、読者を一定方向に誘導する、不可視の「権力」性とでもよぶべき側面を、見事に明るみに出した。この点も、クンデラのテキストの詳細な読解に基づいた、本論文の長所である。

本論文の論旨の一貫性や主旨の明瞭さについては、審査員の評価が分かれた。一見繰り返しのように見える論述の中に、誠実で辛抱強い、首尾一貫した深い思考の跡を見て取る

肯定的な意見があった一方で、論述の、独語的な不明瞭さを批判する意見もあった。

また、以下に列挙するような指摘もあった。

- 1) 小説の自立が主たるテーマであるにも関わらず、クンデラの小説の具体的分析が少ない。
- 2) 「歴史」を論じる際、個別的事象としての歴史と、個別的事象をつなぐ、大きな流れとしての歴史の区別がなされていない。
- 3) 「ミラン・クンデラと「作者」をめぐって」という副題にも関わらず、「作者」という語をめぐる複数の異なる観念の整理が十分になされていない。

これらの指摘は、いずれも重要なものであるが、きわめて困難なテーマに正面から取り組み、忍耐強い思索を通じて一定の結論を導き出した、本論文の価値を大きく損なうものではない。以上から、審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。